

舞台に立つため しっかり生きる



「一生の友達ができた」と
大倉源次郎さん

能楽の大倉流小鼓方十六世宗家・大倉源次郎さん(58、1976年卒)は、「勤労学生」だった。中3のころには舞台上立ち、学費を稼いでいた。

能の世界に入れば、子どもでも「先生」と呼ばれる。「学校にいる時間が、普通の中高生でいられる唯一の時間でした」

稽古の疲れて授業に集中できないことも多かった。友人の間では、授業中に居眠りするという意味の「げんじろうる」という動詞がはやった。

出席日数が足りず、点数もぎりぎり。能に集中するために学校を辞めようと思った時、「今はわからないだろうけど、高校の時間は大切だよ」と先生に励まされた。「甲南

で、学校は社会に出るための予備校ではないと学んだ。自分の世界を作り、試していく場所。良い仲間にも恵まれました」

同級生の俳人で、雑誌「ホトトギス」編集長の稲畑廣太郎さんとは今も親交がある。一緒につくった新作能「実朝」は、各地で上演されている。

「能楽は『能動的に楽しむ』と書く。自分から行動して楽しむ心を、大切にしていきたい」

源次郎さんのいとこの息子で、鼓の弟子でもある能楽師、上田宜照さん(28、2007年卒)も中学から甲南で学んだ。高2の時、友人と2人でクラシック同好会を立ち上げた。初めてベートーベンの交響曲第7番第

2楽章を聴いた時、「能に似ている」と感じた。「潮の満ち引きのように同じフレーズがだんだん大きくなり、また小さくなっていく。強弱が大切な能の謡と同じ。能もこうすればいいのだ、と」

2歳で初舞台を踏み、能しか知らなかった。「それ以外の素晴らしい芸術に出合えたのは、甲南のおかげでした」

荒れた時期でもあった。中学生で声変わりがあり、急に仕事が減って舞台を離れた。ささいなことでも友人とけんか。先生に「そんなじゃ小者だよ」とたしなめられた言葉が忘れられない。

経営者の子息が多い甲南では、「人の上に立つためには人柄が何より大事」という教えが大切にされていた。生きる舞台は違うが、能楽師も同じだという。「人となり舞台上に表れる。本人が幸せでなければ、見ている人を幸せにできません。しっかり生きることが、良い舞台につながります」 (中塚慧)



「能以外の素晴らしいものに
出合えた」と上田宜照さん